町田市で避難生活を送る
東日本大震災の被災者の方々の
講演会の記録

概要

- 講演会名：「『東日本大震災を経験した方からのメッセージ』
—経験者と支援者　2つの立場を通して—」
- 講演者：木幡四郎さん、武田恒男さん
- 参加ゼミ：原田眞理ゼミ、近藤洋子ゼミ、中村香ゼミの学生

- 講演会は2018年12月13日玉川大学にて実施され、その際の録音を基に本記録を作成した

（玉川の教育　教育活動レポート参照）

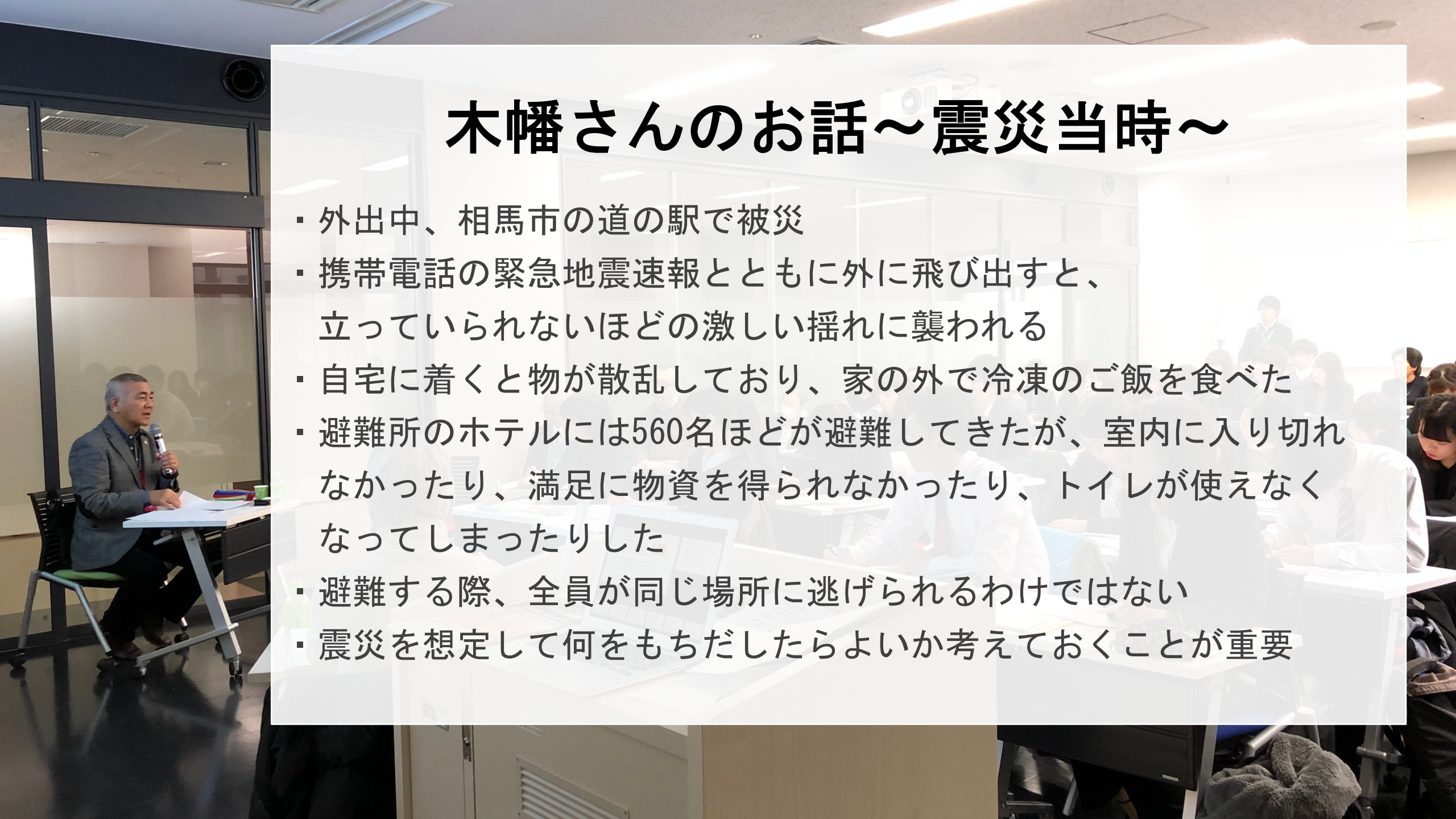
https://www.tamagawa.jp/education/report/detail_15625.html

木幡四郎さん

- 福島県双葉郡の浪江町出身
- 自宅が東京電力福島第一原子力発電所から約8キロのため、避難生活が続いている
- **東北の絆サロンFMI会**
  （F：福島　M：宮城　I：岩手）
  を立ち上げる
- **ふるさとを想う会**を立ち上げる

武田恒男さん

- 岩手県陸前高田市の出身
- 震災前後の街の写真を撮影
- 東北の絆サロンFMI会副会長
- 陸前高田市を舞台にした映画の上映会手配
  （木こりの男性の生きざまを描いた
  ドキュメンタリー映画『先祖になる』）
- ウォーキングのイベントの開催



木幡さんのお話～震災当時～

- 外出中、相馬市の道の駅で被災
- 携帯電話の緊急地震速報とともに外に飛び出すと、立っていられないほどの激しい揺れに襲われる
- 自宅に着くと物が散乱しており、家の外で冷凍のご飯を食べた
- 避難所のホテルには560名ほどが避難してきたが、室内に入り切れなかったり、満足に物資を得られなかったり、トイレが使えなくなってしまったりした
- 避難する際、全員が同じ場所に逃げられるわけではない
- 震災を想定して何をもちだしたらよいか考えておくことが重要

木幡さんのお話
～避難してから～

- 8か所の避難所を転々とし、町田市の都営住宅に住む
- 町田市のロータリークラブや社会福祉協議会、県人会の方々にお世話になる
- 楽しく笑いたい、そして助けてもらうだけでなく自分たちも何か頑張ってお互いを助け合いたいという気持ちから、FMI会を立ち上げた

東北の絆サロンFMI会

- 東北の絆サロンFMI会（F：福島　M：宮城　I：岩手）
- 町田市に避難した当初は、子どもたちのいじめ問題や不登校が非常に多かった

⇓

　地域の人たちとの交流の場として蕎麦打ち教室やハイキング、工作教室を開くことで、子どもたちとの親睦を深めた

⇓

　一年半後には全学校の子どもたちが登校できるようになった。地域の人たちとの交流も活発になった

- 恩返しするために町田市役所でまちカフェに参加して、自分たちで創作したものを販売し、その売り上げを町田市の社会福祉協議会に寄付したりした

ふるさとを想う会

立ち上げた理由：浪江町の人たちのためにできることをしたい

活動内容：県内外に避難した人たちと共に歌う（浪江町・富岡町の学校歌など）

地元の交流を絶やさないため、町田市で餅つきイベントを開催（避難者はじめ約500名参加）

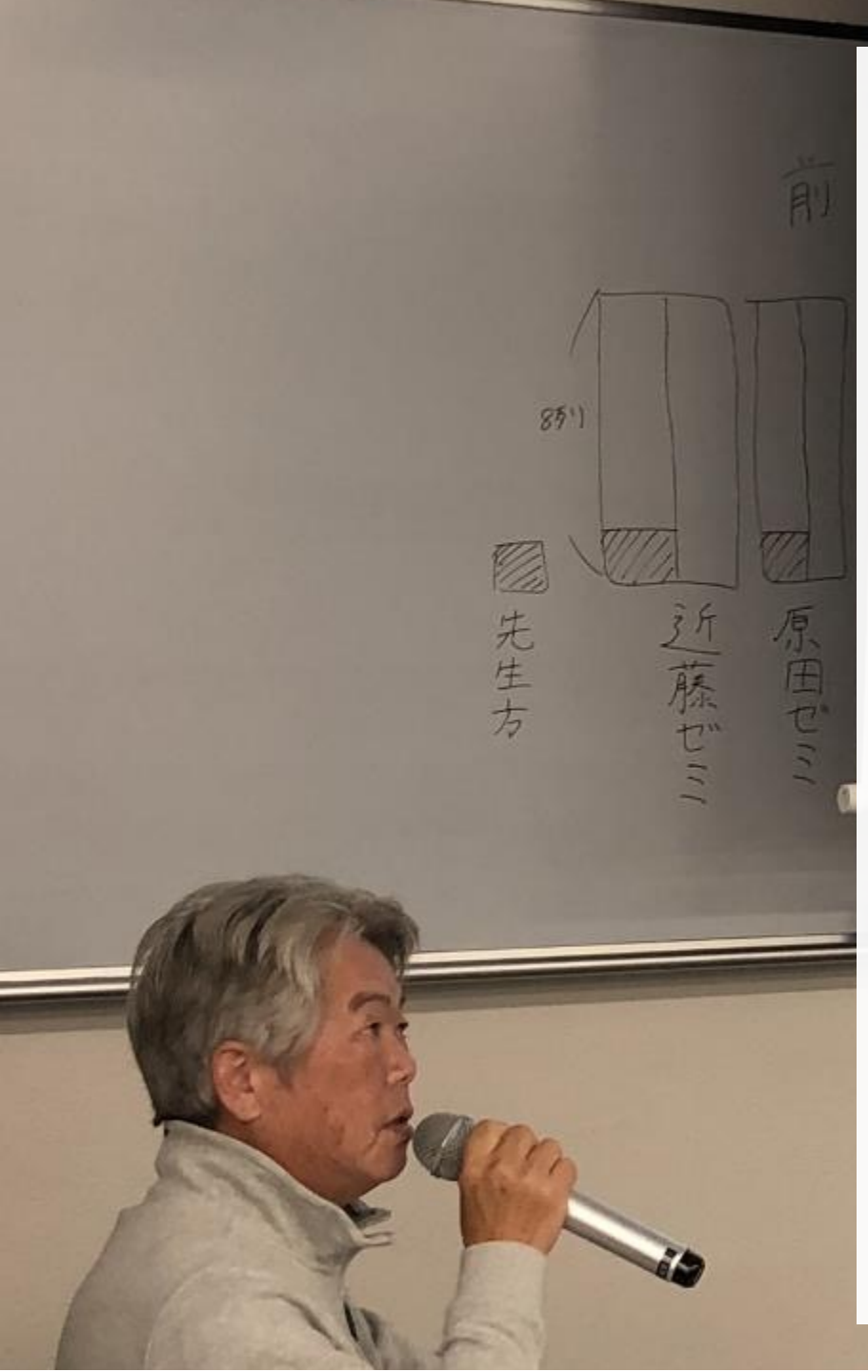
福島第一原発の正しい情報提供をするために、現地で状況確認

↳「確かなことを伝えよう、見る・知る・聞く・伝える」

↳自宅は1.4→0.4マイクロシーベルト

安心で安全な街づくり整備に力を入れることで、多くの人が平等に帰ることができるように努めている

- 生まれ育った故郷を失わないため、ふるさと復興を目指す
- 近年も大きな地震が多々起こっているため、避難時に何をもって逃げるか想定してほしい



武田さんのお話～震災当時①～

- 陸前高田市の市役所周辺で被災
- 地震発生直後、飼っていた猫が家から飛び出し行方不明に
- 高台の中学校に避難し、15分ほど経ってから津波が来た
- 家の中から「助けて」と人の声が聞こえたり、煙が出ていたりしたが、どうすることも出来なかった
- 津波の引き波で家が流され、街中には遺体が数多くあった
- 警報発生地から金庫や金物を盗むよそ者もいた
- 避難先の中学校の講堂には遺体が多くあり、身元が分かる遺体は棺桶に、分からない者は寝袋に入れられていた

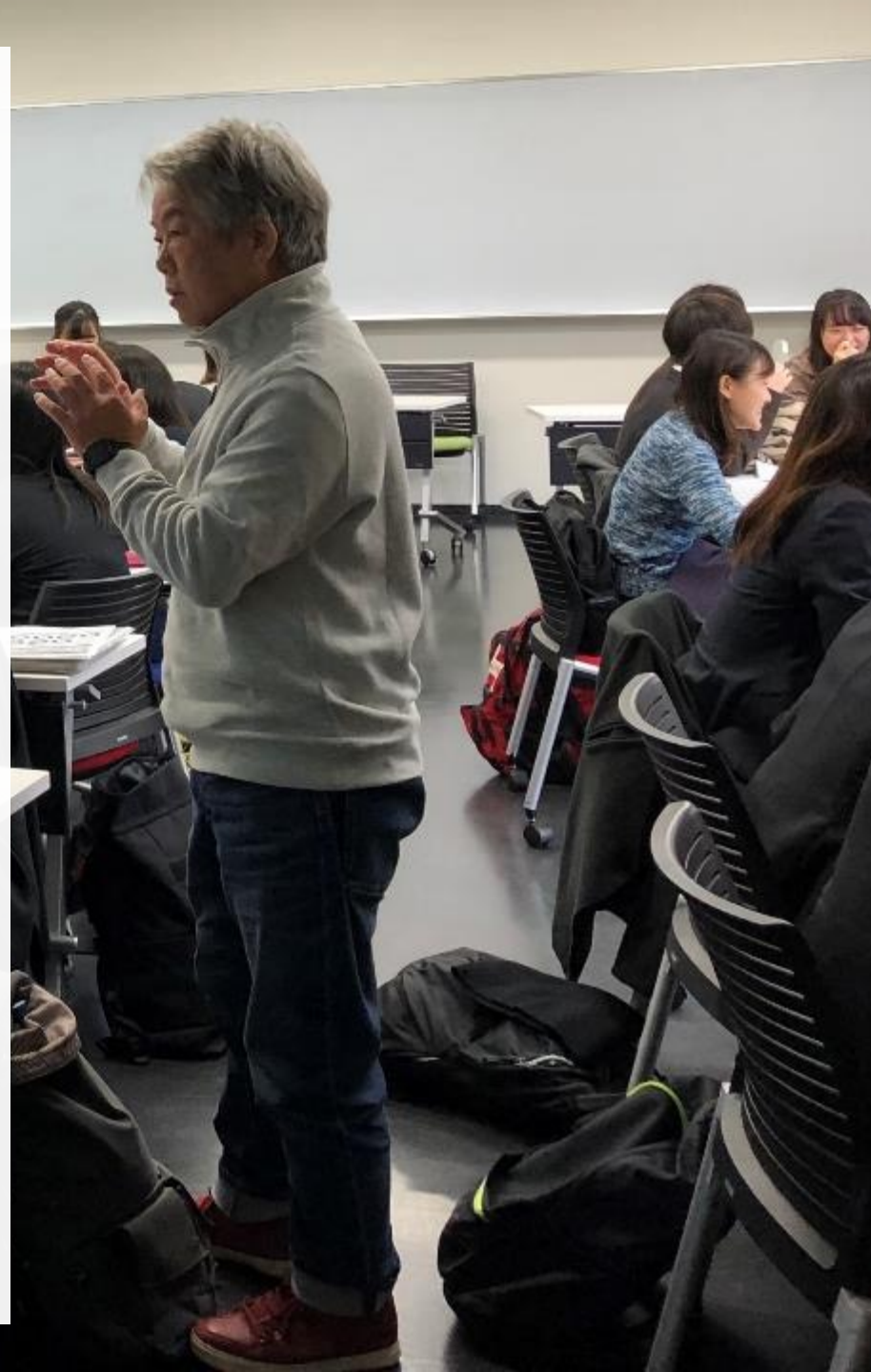
武田さんのお話～震災当時②～

武田さんのお写真から

- 損傷が大きい遺体は、身内でも誰か分からないほどだった
- 毎日火葬が行われ、事務的な作業になってしまっていたため、亡くなった人が浮かばれないと感じた
- 中学校に避難した後、親戚のいる陸前高田市の山の方に避難した（山には水が流れているし、プロパンガスも使える）
- 震災から3週間後に支援物資が届き、毎日取りに行った
- 陸前高田市には毎日ボランティアの方が来てくれていた。学生などの若い人が多く、感銘を受けた

武田さんのお話
～避難してから①～

- 妹さんが住んでいる町田市に避難しようと考えていた
- 避難する時、飲んでいる薬が分かるお薬手帳（小さくコピーして財布に入れる）、眼鏡や爪切り、ラジオ充電器など、日常的に使うものやなければ困るものを備えておくとよい
- 普段付き合いがない人にも助けてもらうことがあるため、人には親切にした方が良いと思う
- 昔の仲間が支援物資を送ってくれたことがあるため、友人のつながりも大切と思う



武田さんのお話　～避難してから②～

- 被災後の陸前高田市で木こりの男性の生きざまを描いたドキュメンタリー映画『先祖になる』が社会貢献基金を基に町田市で無料上演された
- 映画の際に実施したアンケートで、三陸のつながりを持ちたいと思う方が多くいることがわかり、荒川区や豊島区、中野区、松戸の黄色いハンカチなど新たなつながりを広げたいと思うようになった
- 災害が起きた時、自分が力になりたくても難しいと感じる方が多いと思うが、募金活動などでも貢献できている
- 相談会やハンドブックの発行なども行っている

～質疑応答①～

Q.ふるさとへの想いが強いのに、町田で活動をしようと思った理由は？

A.東北では支援者に頼ることが多く、前向きに活動する気持ちになれなかったが、避難当事者が支援者の立場になって物事を考えることで、何かできることがあると思い、活動することができた。

Q.避難するにあたり、持っていくべきものは？

A.印鑑、通帳、保存食、マスク、ホッカイロ、ガソリン…

被災した時でも慌てない心の余裕が必要

～質疑応答②～

Q.当事者から支援者となった原動力の源は？

（木幡さん）元気な被災者を見ることが最大の目的

避難当事者は「ちゅうぶらりん」な状態であっても、その時の状況や場所を一生懸命に生き、一歩一歩前進していくことが大切である

一日でも元気に、少しでも笑顔に、心底笑える日常をつくりたい

（武田さん）被災した人の気持ちを軽くしていきたい

義務感はなく、相手が喜んでいることに対する楽しさややりがいが大きい

～質疑応答③～

Q.美しい海が津波として牙をむくことがある
その経験をして、海に対してどのようなことを思うようになったのか？

A. （武田さん）最初は江の島の海が怖く感じた
知人の漁師さんが海にお世話になっているため、海を悪くいえないが
津波の不安に駆られることがある
年に数回、津波に飲み込まれる恐ろしい夢を見る
被災当時の様子を思い出すと、生き残ってよかったという気持ちになる
避難した場所で普通な生活が送れることにありがたみを感じる

グループディスカッション

一避難者の方々に小グループに入っていただき、学生たちの討論が行われた

テーマ『震災に対して大学生としてできることはなにか』

- 物資の提供や募金も大切だが、まずは忘れないことが重要（近藤ゼミの学生）
- 教師になったら、子どもたちに伝えていきたい（近藤ゼミの学生）
- 募金などのイベントを企画したい（原田ゼミの学生）
- 震災にフォーカスするだけでなく、楽しさも感じられることが大事（原田ゼミの学生）
- 教師として行動力や判断力の重要性を子どもたちに伝えていきたい（中村ゼミの学生）

武田さんが心を打たれたメッセージ

柴田トヨさん（98歳）からのメッセージ

「被災地のあなたへ。最愛の人を失い、大切なものを流され、あなたの悲しみは計り知れません。でも生きていればきっといいことがあります。お願いです、あなたの心だけは流されないで、不幸の津波に負けないで。」

この言葉で、自分は生きているのだから、亡くなった人の分も、あるいはそれ以上に頑張ろうと力をもらった

あとがき

東日本大震災の時、私たちはまだ小・中学生でした。この成果物を作成するにあたり、木幡さんや武田さんが現地で体験された震災や原発事故の悲惨な様子を知り、改めて震災や原発事故の恐ろしさを感じるとともに、後世に語り継いでいく必要があると思いました。

地震による一次被害、津波や原発事故による二次被害、そして物資も十分ではない状態での避難生活。私たちの想像を超える避難生活を送られていたことや現地へのボランティアの重要性について学ぶことができました。

日本は自然災害の多い国で、この穏やかな日常がいつ、どのような形で崩れていくのか誰にも予想することができません。しかし、この講演会から得た学びを基に、自然災害を想定した準備を整え、どのような災害や事故が起こっても、慌てず、周囲の人と協力して前を向いていきたいと思いました。

参考資料

町田市で避難生活を送る東日本大震災の被災者の方の講演会

（玉川の教育　教育活動レポート）

https://www.tamagawa.jp/education/report/detail_15625.html

陸前高田出身の方への聞き取り活動

（臨床心理学ゼミ　成果物）

https://www.tamagawa.ac.jp/education/assets/pdf/seminar/cp-pdf-01.pdf

記録・編集

玉川大学教育学部　原田ゼミ5期生

指導教員　原田眞理

2021年7月作成

個人の使用は自由ですが、内容は改変できません。
本冊子を使用したり内容を引用したりする場合は、
引用元を必ず明記してください。非営利目的での
使用を許可します。©玉川大学教育学部原田ゼミ